

市指定
史跡

大牧1号古墳

(各務原市鷺沼大伊木町)

—— 華麗なる武人の墓 ——

発行 各務原市教育委員会文化課
〒504-8555 岐阜県各務原市那加桜町1-69
TEL (0583)83-1111(代)



発掘調査中の大牧1号古墳

大牧1号古墳の発掘

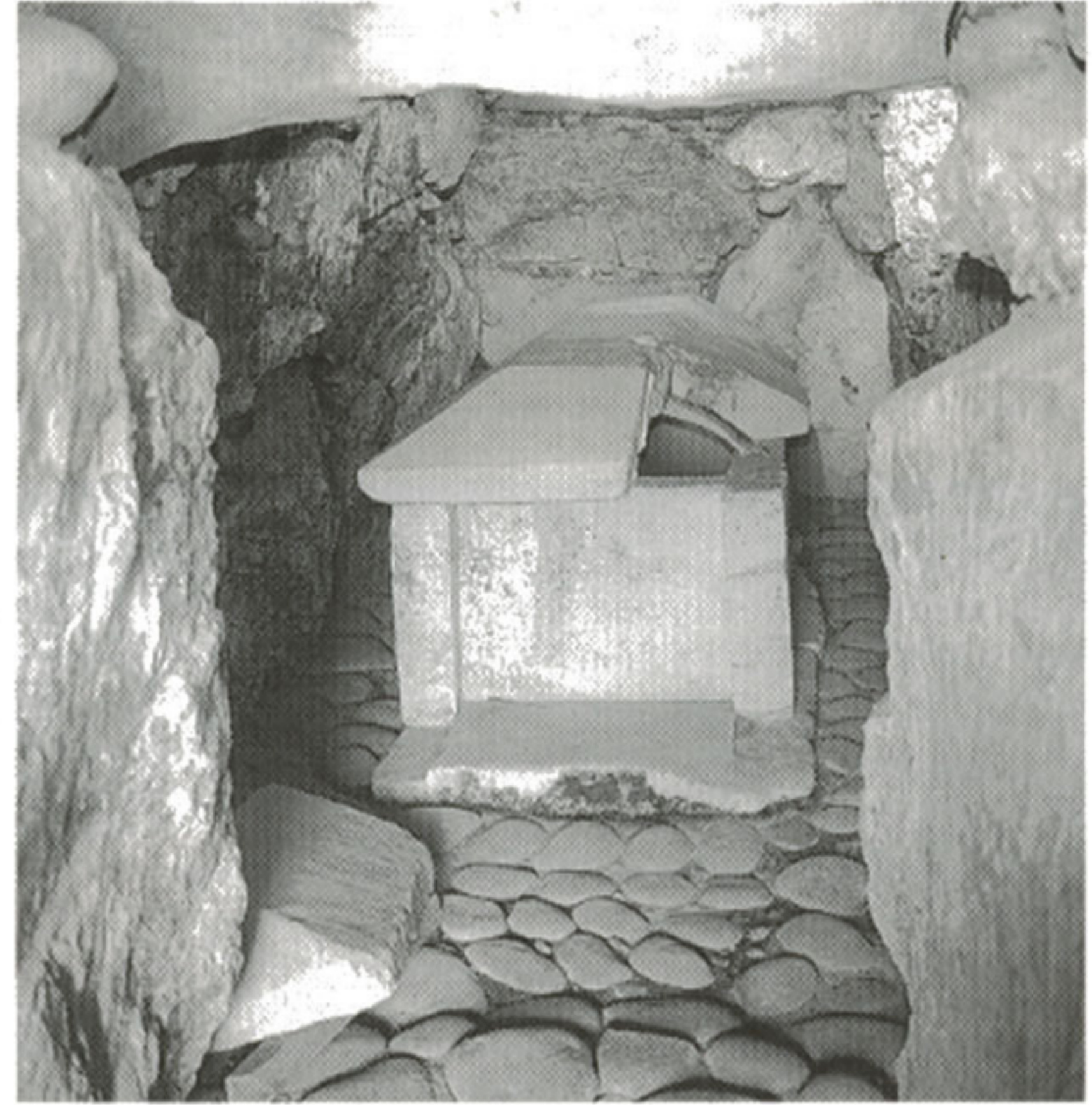
大牧1号古墳の発掘調査は、陵南小学校建設工事に伴う事前の緊急発掘調査として、昭和57年11月から翌年2月にかけて実施されました。

この古墳は、木曾川を望む大牧台地の北東端部に造られており、その周囲一帯にはかつて60基以上の古墳が分布していました。大牧古墳群と呼ばれる古墳時代後期の群集墳です。現在では、この古墳の西方約300mの台地西端部に、前方後円墳のふな塚古墳（現存全長約45m）が存在していますが、大牧1号古墳やふな塚古墳は、この大牧古墳群の盟主的古墳に位置づけられます。

大牧1号古墳は、発掘調査の結果、今から1400年ほど前の6世紀末頃に造られた直径約30mの円墳と考えられ、北部から東部、そして南部にかけて、幅約5mの周濠が断続的にめぐっていましたが、この周濠の形態が前方後円形をしていることから、本古墳が円墳ではなくて、前方後円墳ではないかとも考えられています。

古墳のなかで遺体を納める施設は、5世紀後半以降に全国的に普及した横穴式石室と呼ばれる施設で、遺体を安置する玄室は、奥行き約4.5m、幅約2.5m、天井までの高さは約3.5mです。玄室の中央には、凝灰岩製の組合せ式家形石棺が置かれていました。石棺の大きさは、全長約2.4m、幅約1.2m、高さ約1.3mで、表面には部分的に赤色顔料が塗られています。

玄室の手前には、通路としての羨道部が付属し、さらにその前方には川原石で壁を積み上げた前庭部と呼ばれる部分があります。羨道部の大きさは、長さ約3.5m、幅約1.5m、高さ約2mです。前庭部は前方に裾広がりを開く形態をとり、天井はありません。ところで、大牧1号古墳の特徴は、この前庭部の南方にさらに墓道と呼ばれる通路が掘られていることです。墓道は周濠を断ち切ったのびており、その先端は不明ですが、おそらく、台地から木曾川の河川敷まで続いていたのではないかと考えられます。

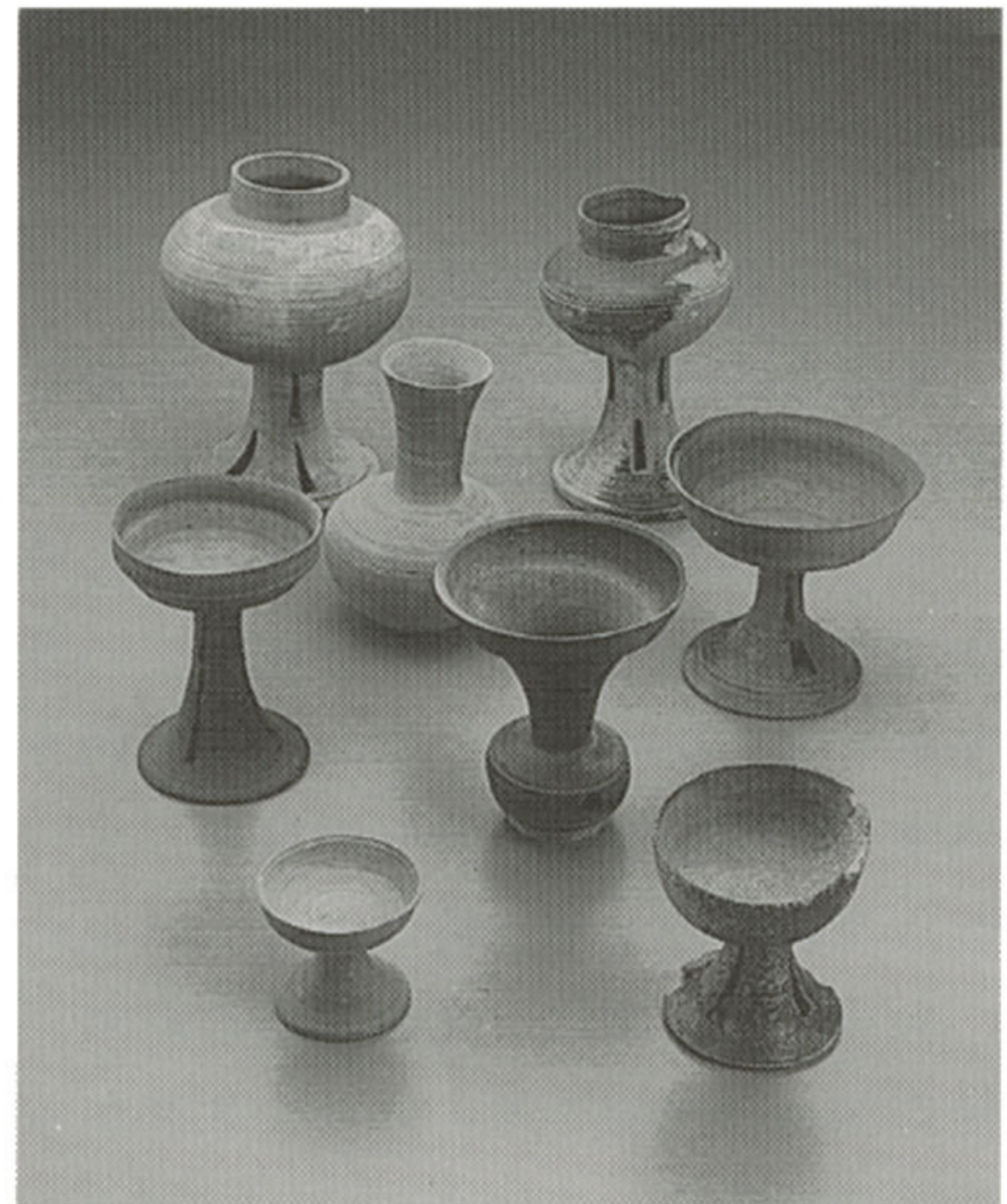


玄室内家形石棺

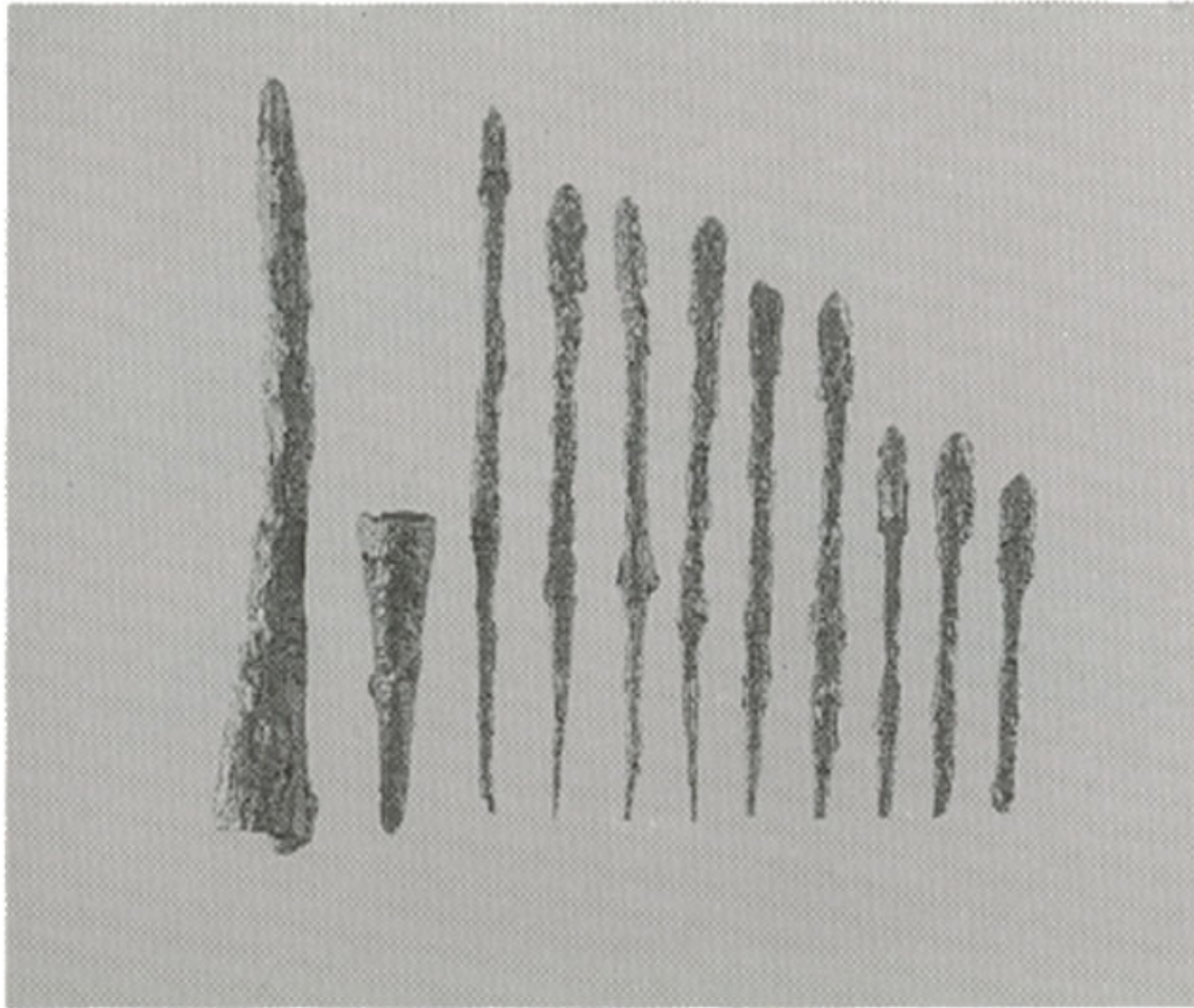
家形石棺について

石棺とは、古墳に葬られた死者を納める施設で、その形態によって割竹形石棺、舟形石棺、長持形石棺、家形石棺などの種類があります。大牧1号古墳の石棺は、板状に加工された石材を組み合わせてつくられた、組合せ式家形石棺と呼ばれるものです。

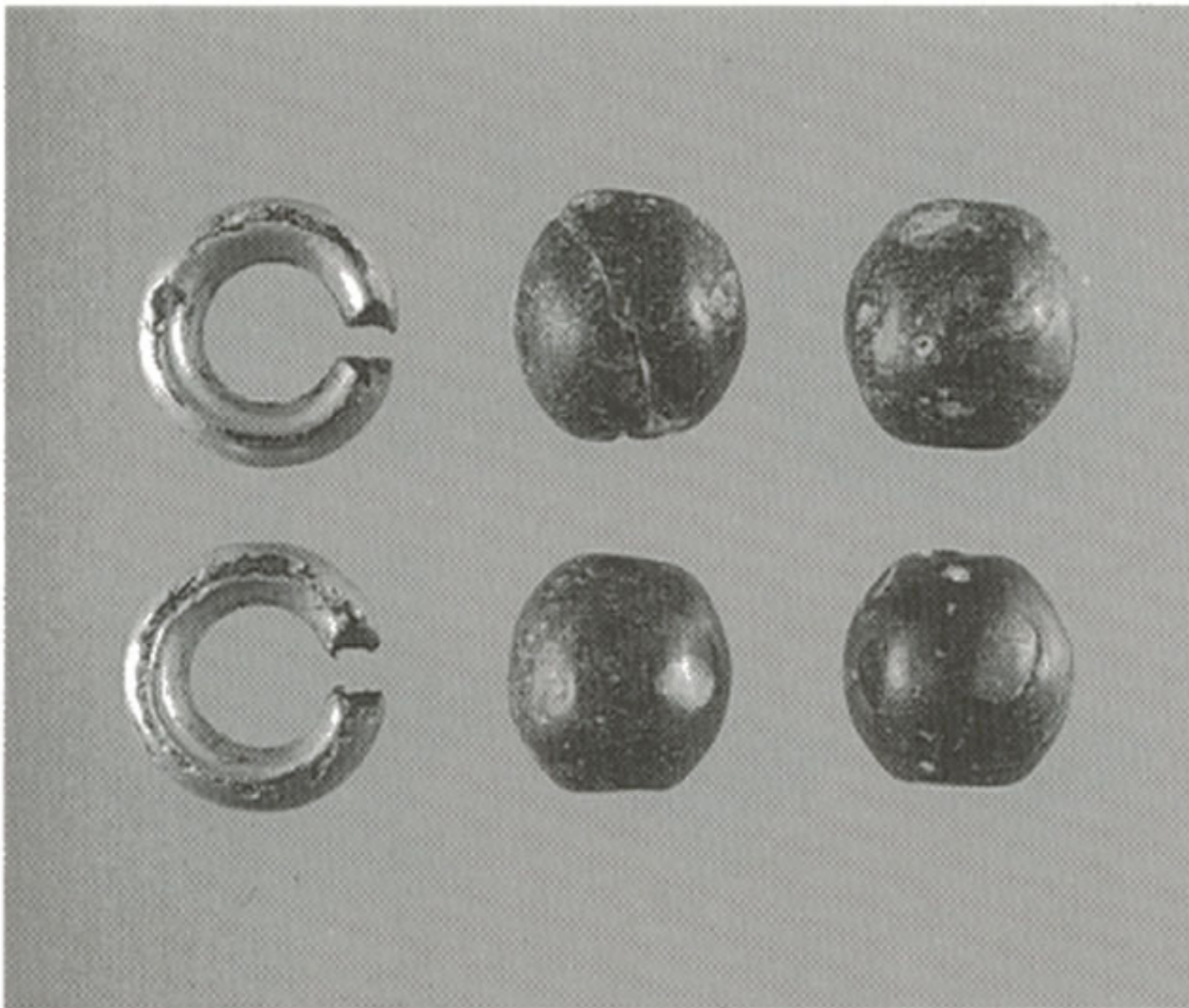
岐阜県では、木曾川上流の可児市を中心とする地域の古墳から石棺が多く発見されており、各務原市では、大牧1号古墳のほかに、鵜沼西町に所在する狐塚古墳からも家形石棺が発見されています。また、木曾川の対岸、愛知県犬山市から一宮市周辺の古墳からも同様な石棺が多く発見されていることから、大牧1号古墳や狐塚古墳の石棺は、犬山、一宮地域を中心とする石棺の分布の北限をなすものと考えられます。



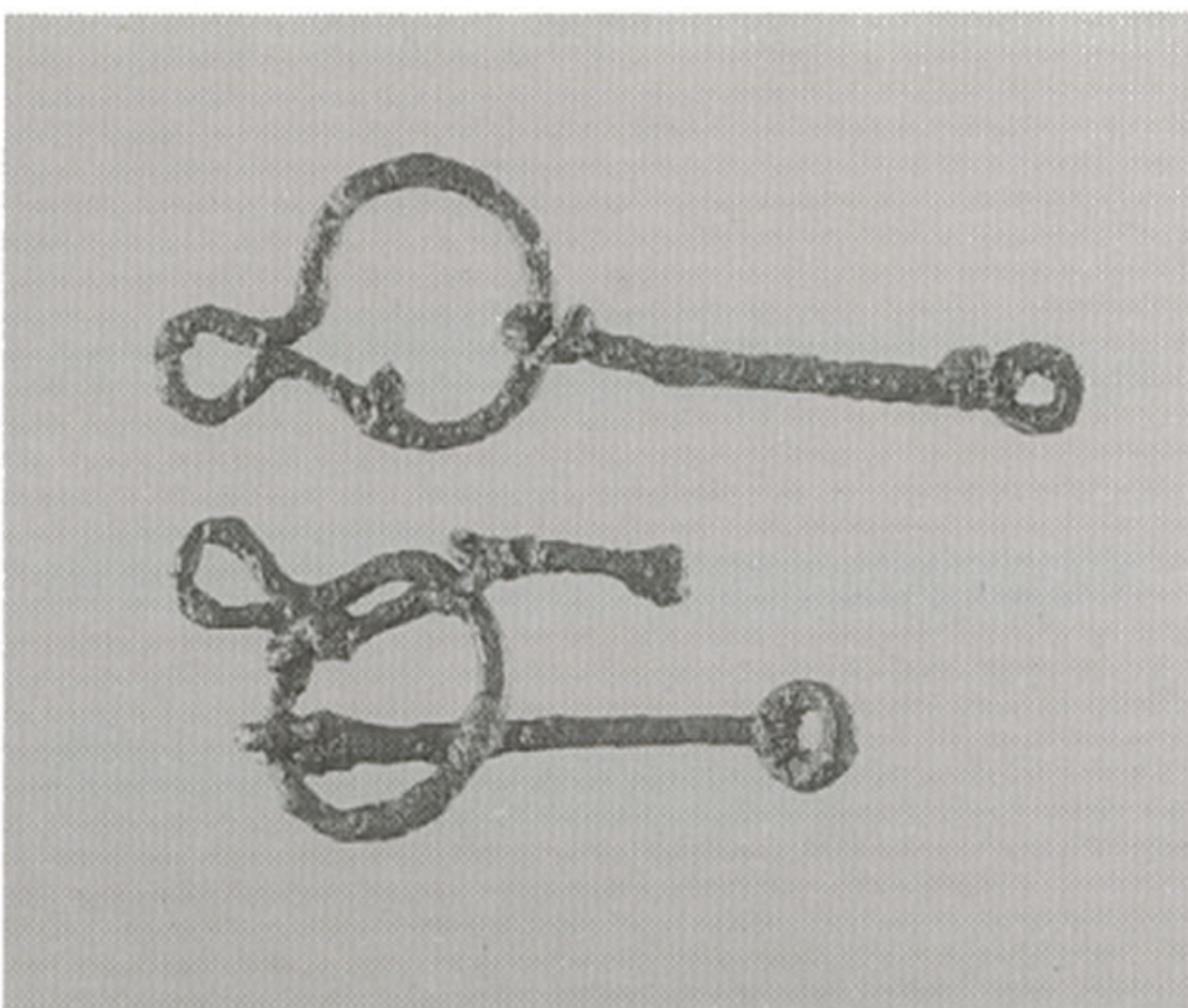
石室内出土須恵器



石室内出土^{ほこ}鉄鏃(左2点)と鉄鏃(右9点)



石室内出土金環(左)ととんぼ玉(右)



轡

副葬品について

副葬品とは、遺体を葬る際に、死者と生前関係の深かった品物や、死者への供物を土器などと一緒に古墳に納めたもので、副葬品の性格や種類を研究することによって、その古墳に葬られた人物の生前の社会的地位や身分あるいは、広く当時の生活習慣などを知ることができます。

大牧1号古墳からは、当時の食器である須恵器のほか、葬られた人物の性格を表わすと思われる刀や^{ほこ}鉄鏃(矢じり)、金銅で飾った^{とうす}刀子と呼ばれる小刀などの武器類。挂甲と呼ばれる騎乗用の^{よかい}鎧、また、古墳時代後期の副葬品を特徴づける^{くつわ}轡や^{あまみ}鎧などの馬具類が出土しています。特に馬具の中には、^{ぎょうよう}杏葉、^{つじかなぐ}辻金具、^{いそかなぐ}磯金具などの金銅で飾りたてたものや、銀象嵌で文様を施した^{うず}雲珠などの華やかなものが多くみられ、死者の生前の地位をしのばせています。また、装身具としては、ガラス製の^{きんかん}とんぼ玉や金環、銀製の^{うつろたま}空玉などが多数出土しています。

大牧1号古墳の性格

大牧1号古墳は、ふな塚古墳とともに大牧古墳群の中心的な古墳です。

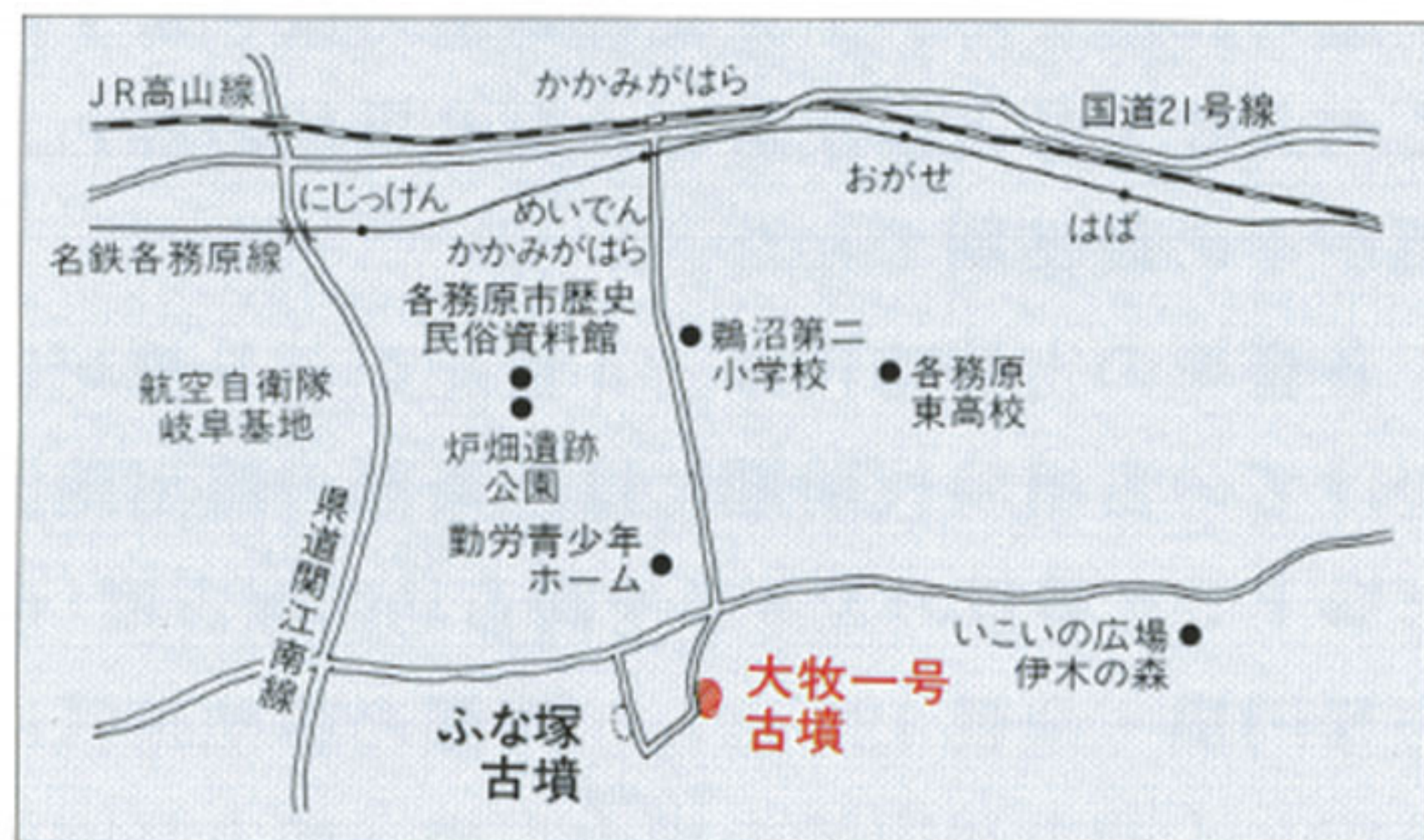
大牧古墳群は、およそ6世紀初めから古墳が造られはじめ、7世紀終末まで続きますがこの大牧1号古墳が造られた6世紀の終わり頃がその最盛期でした。

各務原の古墳時代は、4世紀から5世紀にかけての古墳時代前期には、東部の鵜沼地区に県下で2番目の大きさを誇る^{ぼう}坊の塚古墳(前方後円墳・全長120m)、西部の那加地区には同じく前方後円墳の^{からやま}柄山古墳(前方後円墳・全長82m)、^{みなみづか}南塚古墳(前方後円墳・全長

推定85m)、岐阜市琴塚古墳(前方後円墳・全長115m)などの大規模な古墳が造られました。ところが、6世紀の古墳時代後期になると、鶉沼・那加地区での大規模古墳の築造は断絶し、替わって境川流域の各務・蘇原地区や木曾川流域の稲羽・鶉沼(大牧)地区に有力な古墳が造られるようになりました。

大牧1号古墳はその中のひとつであり、石室の大きさや華麗で豊富な副葬品の内容などから、豪族と呼ばれる当時の有力者の墓であると考えられます。また、玄室内に納められていた石棺が木曾川の対岸の犬山・一宮地域にも多くみられることから、大牧1号古墳に葬られた人物は、犬山・一宮地域とも何らかのつながりがあったのではないかと考えられます。

美濃と尾張の境界をなすこの木曾川流域は、古代に限らず、政治的意味において、あるいは、軍事的意味においても、たえず要衝の地であり続けました。その重要な地である木曾川の北岸に大牧1号古墳が造られ、副葬品の中に武器や武具のほか華麗な金銅装の馬具類がみられることは、大牧1号古墳に葬られた人物がこの重要な地域を掌握しつつ、おそらく当時の大和王権とも緊密な関係を結んでいたと考えられるのです。



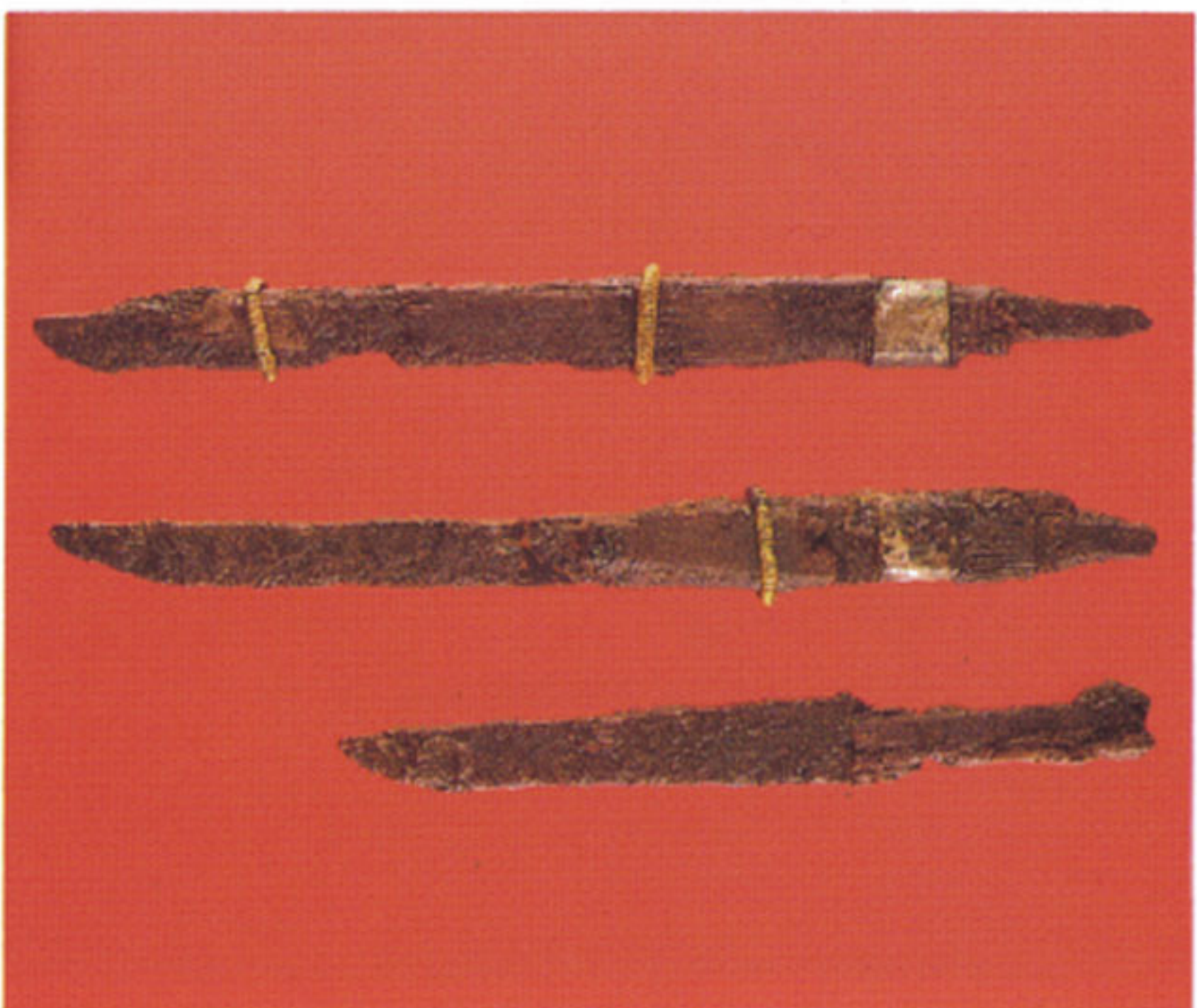
撮影協力：藤田一郎



鞍金具



雲珠・辻金具



刀子